西洋のように普遍的認識となった上帝創世説はない。それでは、天地万物はどこから来たのか。

これらの問題に対して、中国古代の思想家や哲学者は、回答を提出しなければならなかった。彼らは、「観象(自然現象を観察する)」、「観法(法則を観察する)」「鳥獣の文を観る」等の観察方法や、「近きはこれを身に取り、遠きはこれを物に取る」といった方法で、陰陽・男女が交合によって新しい生命が誕生することから、天地・乾坤が交合して万物が生育する理論や学説を推察論究した。これは即ち「天地絪蘊して、万物化醇す。男女構精して、万物化生す」の「和実生物」説である。それは、上帝が万物を創造するのでもなければ、唯一の絶対者が万物を生産したのでもなく、多くの差異(ちが)った異質の要素が融突し和合して化生したものである。例えば「土と金・木・水・火とは雑はりて以て百物を成す」。「雑」には和合の意味がある。即ち老子が述べた「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」(第四十二章)の「道」も亦た唯一絶対の存在ではなく、「一陰一陽、これを道と謂う」である。即ち「(万物は)陰を負いて陽を抱き、冲気以て和することを為す」(老子第四十二章)の道である。この和合的思惟は西洋の神の創造的思惟と異なった独自の思惟様式・価値観念・心理構造・審美情趣、及び人と自然・社会・人と人・心・文明の間の関係を処理するための独自の様式方法を提起した。

和合学は天地万物生生の本質と生命力の所在、及び天地万物間の融突和合の関係を掲示している。和合学の範疇や体系・論理構造・関係のネットワークや転換の仲介は、高度に分極化されて、自組織の系統的な目的性や複雑性を持った巨大な文化体系である。これは、現代科学技術の研究全体にわたる複雑性の発展の様子と同様である。

**(続く)**

かという方法や手段についての模索である。これらの模索はさらに多くのいろいろな方法を提起できるであろうが、しかし未だに新しい理論や学説を提示するには至っていない。例えば中体西用説・西体中用説は、どのような学説を体系化したであろうか。「創造的転化」は、新しくどのようなものに転化させたか。総合創新の「新」理論とはどのようなものか。それらの全てが「混沌」であり、その深層には均しく価値観の問題が潜伏している。

中国史上、宋代思想家は唐末五代の社会的大動乱後の無秩序的現実からの挑戦に直面し、インドからの外来仏教文化が不断に社会の底辺まで深く進入して来たところの挑戦や、及び土着の道教文化からの挑戦に直面していた。唐から宋初に至るまでは、儒・仏・道の三教兼用の方法や手段を採用し、三教思想を体系化することが期待されていた。しかし、当時は三大挑戦に対する効果的な対応もなければ、新理論や新学説の体系化もなかった。やがて、程頤が「吾が学は受くる所ありと雖も、天理の二字は却ってこれ自家体貼し出で来る」と提示した。それ以来、この「自家体貼し出で来る」の「理」が、即ち儒・仏・道の三教を体系化した「整合創新」の「新」であり、これによって兼用の方法も「安頓処」を得ることができ、宋明理学の新時代を切り開いた。兼用（「兼用並蓄」）は、中体西用・創造的転化・総合創新等と「名」は異なっているが、「実」は文化を体系化する方法や手段としては同じである。

現代三大挑戦に対する中国文化の回答として私は、董仲舒の「三年、園を窺はず」の精神で、思いを尽くして「和合学」を考案した。この和合学は、この一世紀、中国伝統文化を現代化するために提起された種々の方法や手段に、それぞれの結実と安頓を与えることができるであろう。この和合学が現代三大挑戦を処理し解決するために、巨大で有効な活きた智慧を発揮することを、私は期待している。

和合学の和合的思惟は、西洋の神の創造とは、その趣旨が異なっている。西洋文化には普遍的な共通認識として強調されている上帝による「創世紀」の説があるが、それは、天地万物の起源に関する問題を解釈したものである。上帝は唯一で絶対的存在として、現代まで継続されている。中国文化には、

## 自　序

筆者の中国哲学論理構造論、伝統学、新人間学等の模索は、中国伝統哲学を超越する試みであり、それは中国文化の精神や活きた智慧と人間的情感を延長継続したものである。ここ六年間、和合学を探求してきたが、それは和合が中国文化の人文精神の精髄と主要価値だからである。一つの理論は言うまでもなく、どんなに厳密で精緻であっても、それが現実や真実に符合していなければ、革新し修正することを求めらる。一つの制度が社会の進歩と発展に符合しなくなれば、改造や改変が求められるようなものである。

和合が中国文化の人文精神の精髄と主要価値であると述べた理由は、現代の中国文化が三大挑戦に直面しているからである。第一は、人類共通の五大衝突（人と自然・人と社会・人と人・人の心・異文明の間）からの挑戦である。第二は、西洋文化からの挑戦である。第三は現代化からの挑戦である。以上の三大挑戦に応じる最も優れた文化的選択が、和合学である。

「融突して和合する」、これは人類が共同に直面している五大衝突を解消することに対して大きな魅力を持っている。また、西洋文化の挑戦に応対することに対して強大な生命力（エネルギー）を持っている。伝統文化の現代化に対しても内発的駆動力になる。和合学でなければ、人類が直面している五大衝突を、合理的に道徳的に審美的に解決することはできない。またそれは、創造的に東洋と西洋との文化的価値の和合を成就し、現代文化の転換を解決することができ、中国文化を斬新な容貌にととのえて世界に立ち向かわせることができるであろう。

中国の伝統文化を如何にして現代化するか。ここ一世紀以来、中国人は相次いで実践を重ねてきただけではなく、いろいろな主張やアイデアを提起してきた。例えば中体西用・西体中用・中西相互体用・中西を体とし中西を用とする説等。抽象的継承・選択的継承・広角（全体）的継承・具体的継承論等。創造的転化・創造的解釈・総合創新論等。及び全面的西洋化・儒学第三期発展・儒学復興説等がそれである。これらの論説は皆、どのように現代化する

ころであり、追究すべき課題でもある。それによって、和合した新しい生命が生生して息まないものを求める。

対称整合は和合学の内在的であり外在的な構造方式である。劣を淘汰し優を選択すること（汰劣択優）は、和合学の価値取向と価値公度である。対称整合と汰劣択優の所以は和合学の構造方式と価値公度であり、又それは和合学が関心をもち探索する課題であって、和合新生命の生生不息を求める。

**〔（五）中和と審美　に続く〕**

ここで述べているある種の転換には「整合」の方法が含まれている。整合は、多種多様な元素・要素が統一され、一つの整然とした構造を構成することである。例えば一人の人間の複雑な行為の発生は、全ての行為の構造の整合に依存している。行為構造の整合は、行為構造の各部分の活動が相互に配合しあい協調しあって統一されることである。即ち人間の感情構造、理性構造、理想構造、意志構造、行動構造の整合によって協調され、バランスの取れた統一された行為構造が形成されるのである。

もし衝突に対称が含まれるとすれば、融合にも整合が包含されている。これによって、対称整合は融突と関連していると言えよう。対称の差異は、「相対相成」を意味しており、決して「独対独成」ではない。「相対」は、こちらで消失し、あちらで誕生したり、あちらで消失し、こちらで誕生するようなことを意味している。即ち対称や相対の中での「優の選択」を意味している。「優の選択」は即ち「劣」に対する否定と淘汰である。「対称整合」は、即ち劣の淘汰と優の選択である。それによって、全体の統一と調和が達成される。

和合学の宗旨は「和」である。それは、自然・社会・人間と人間との間・心・文明、これらすべての調和・協調・秩序に対する模索である。この絶えず破綻していき完成していく過程の「然る所以」に対する探求である。何が「優」であり、何が「劣」であるか、それは何故かについての追究であり、及び何が優と劣を判別する価値基準であるか、それは何故かについての追究である。対称整合は中国の人文精神の原則として多種多様な元素や要素の優質成分が和合して、新しい事物・新しい生命となっていく中で重要な役割を担っている。それが多種多様な優質成分を提供しただけではなく、全体の運動を協調させ安定させて、新しい事物や新しい生命が順調に誕生することを促進している。

対称整合は、和合学の内在的であり、外在的な構造様式である。劣を淘汰し優を選択すること（汰劣択優）は、和合学の価値判断と公的な価値基準である。何故、対称整合は和合学の構造様式であり、劣を淘汰し優を選択することは和合学の価値基準であるのか、その理由はまた、和合学が関心を持つと

いて対峙しあっていることの表象である。「太極図」は、締結しあい転換しあっていることによって引き起こされた対称である。それは物理学で説く左右間の完全に対称しあっているのと符合しており、この種の対称は量子力学のなかで一種の「守恒定律」に成っているもので、「宇称守恒（エネルギー不滅の法則か？）」時間の移行との対称や対応はエネルギーの「守恒定律」であり、空間の移動との対称や対応は「動量守恒定律」である。

対称はまた境界線や真ん中の断面から両サイドの部分が対応しあう大きさ・形・位置を持っていることとして解釈されている。これは左右の対称であり、中心の対称である。自然界や工芸美術作品においては各種の旋転、移行と関係のある対称が存在している。物理学においては原子が空間の中で相互に集合しあって、分子や結晶に結合し、分子や結晶のなかの原子の分布や結合の方式が分子結合・結晶結合と称され、結晶結合は空間の「点陣周期性の対称図像」をもっている。このような図像は早くから人々から注目されており、例えば「雪の多くは六角形」説があり、また王廷相は「春の雪が五角」を否定して「僕は北方の人なり。春雪に遇うごとに、袖を以って承(う)けて観れば、並(み)皆な六出(ろっかく)なり。五出(ごかく)と云うもの、久しきかな、これを妄談に附することや」と述べている。これは六重の対称の結晶体の構造様式である。

対称はまた事物の全体統一性の系統と、その系統内部の各要素・元素間のある種の相応する等価値性の関係である。この関係を概念化すれば、例えば左右・上下・遅速・動静・集散・始終・有無・形神等である。対称と相反して、もし系統が一定の媒介され選択され交換された後、変化を生じたならば、それは非対称である。非対称とは、対称の破綻のことである。相対論量子物理学によれば、すべての電粒子は常に同質量の対極の電粒子を持っている。

対称と非対称はそれぞれ、系統において転換が発生する前と後の二つの状態である。非対称は、系統内部の異なる要素・元素、また系統・環境間の差異によって衝突が引き起こされた特徴的な現象である。（弁証法的に言えば）衝突は新たな整合を意味しており、また否定をも意味している。ある種の転換を通して新しい対称が出現する。

# 『和合学概論　21世紀文化戦略の構想』

張　立文

共訳　難波征男
張　翌彤

## 第二章　和合と和合学

### 一　和合の釈義（『福岡女学院大学紀要』第９号に掲載）

### 二　和合学の真義

#### （一）「然（しか）り」と「然（しか）る所以（ゆえん）」

#### （二）　変化と形式

#### （三）　流行と超越（『福岡女学院大学紀要』第10号に掲載）

#### （四）「対称」と「整合」

「優」と「劣」は対称の価値判断であり、「淘汰」と「選択」は相対的な主体の態度と方法である。対称（symmetry）の原意は、均称（バランス）がとれており完美（完璧）であるということだ。後に人々は往々この言葉を用いて二つの対峙している物、あるいは類似している物の状況を結びつけており、それは美学的バランスとは意味が異なっており、また現代科学の述べている対称性の意味ともやや区別される。それは例えば虎と羊、粒子と波動が構成した相互に対称しあっている関係についての論述（注　ルイス・デ・ブローグルの博士論文）を意味している。中国の「太極図（陰陽魚）」は最も顕著に対称の原則を表現しているが、即ちそれは宇宙観のあらゆる現象が形態と構造上に於

階級的先進者か落伍者か、革命的か反革命的かという両者対戦的視角によって、中国古典哲学思想に対して二者択一に評価していった。侯外廬を代表とする『中国思想通史』、任継愈を主編とした『中国哲学史』、馮友蘭の『中国哲学史新編』等がその代表的著作である。

そして、文化大革命が自己批判された改革開放の後半30年を迎えた。張立文は「1978年、中国は改革解放、中国文化哲学の春を迎えた。その研究方法や視角は多元化し、各種各様の中国哲学の著作が雨後のタケノコのように出現した」と、その情況を説明して、次のような具体的分析を行っている。

①全体性を把握した通史。記伝体・思潮や学派・範疇の発展・学案等をそれぞれ主とした著作が頻出した。

②中国儒学史・黄老学通論・中国文化史等の専門書。

③先秦・両漢・魏晋・宋明・近代・現代等の断代的哲学文化史。

④専門家による個別研究書の出版。大別すれば、「我、六経を注す」と「六経、我を注す」の二種類であるが、各哲学者の哲学内容や政治態度を研究するものと、哲学の論理構造を研究して中国文化に内在する論理を探求するものとに分けられるであろう。

80年代から90年代になると、「我、六経を注す」から「六経、我を注す」時代へ移行し、文化問題は史上空前の活況を呈するようになった。中国伝統文化は西洋文化からの挑戦と現代化の課題の荒海の中で、中国独自の哲学を構築する作業が進められ、遂に馮契の『智慧説三編』と並んで、張立文『和合学概論－21世紀文化戦略的構想』が発表され、「史と智」「事実と思惟」の衝突融合から新しい和合が実現した。

以上、張立文の「宋明学」と「新理学」「新心学」「新気学」に対する評価と、それらを超克して形成された「和合学」の中国近百年史における思想史的意義についての試論である。

**尚、本稿では『和合学概論』第二章二（四）「対称と整合」、及び『同』自序の翻訳を掲載する。**

ないことであるが、旧三学も新三学もそれぞれが形而上学的本体論を構築してはいる。しかし、それらは新しく総合されることを停止しており、各要素の優秀な成分のエネルギーを吸収して、新しい事物を創造する生命力を失っている。彼らが、自分自身の本体論についての究極的解釈や究極的根拠を超越することは不可能であり、また彼ら自身の解釈のどうどう巡りから抜け出すことも不可能である。

和合学は、旧三学や新三学を超越しているが、その意味は中国の伝統的な形而上学的本体論の枠組みを打破して、和合学の新しい哲学大系を構築することである。（「同上」『同上』）

## 三

張立文は、世界に開かれた20世紀の中国哲学界の動向を、前50年と後50年に分けて次のように概観している。先ず前50年については、

**①新心学の構築**　康有為・譚嗣同・梁啓超・梁漱溟・熊十力等。彼らは陸象山・王陽明の心学や致良知説を継承発展させて、それぞれ独自な思想活動を展開したが、梁漱溟が陸王心学者としては最も有力者であり、熊十力が最も独創的学者である。また馬一孚は陸王学の反程朱学的意識を踏襲して反伝統・反権威による自我意識を重視して五四以来の時代的要求に合致した。

**②新理学の構築**　馮友蘭・金岳霖。朱熹が南宋における民族存亡の危機を憂患して朱子学を構想したのを継承して、民族危機の抗争の中で『新理学』を完成した。

**③儒学と仏教との融合による哲学の構築**　章太炎。

**④唯物史観の運用**　郭沫若・賀麟・李石岑・範寿康。郭沫若はマルクス主義の唯物史観によって中国古代社会と先秦諸子思想を研究。賀麟は弁証法的唯物論を研究した。

次に後50年については、それを更に前半20年と後半30年の二段階に分けている。前半の20年は『ソ連共産党史』とジダーノフ著『哲学研究に関する講話』の影響が強い時代である。この時代の傾向は、唯物主義か唯心主義か、弁証法か形而上学か、

のである。

哲学することと、哲学や哲学史を研究することは根本的に異なる。哲学するためには、哲学者の主体的哲学行為が基本であり、哲学研究は手段である。そこで、例えば「禅宗の自ら主宰と作る精神や、仏を超え祖を越える気概」が哲学者の姿勢には必要である、と張立文は述べている。三派説を主張する張岱年の宋明学研究は、張岱年哲学を構築する立場からの哲学的資料評価ではなかっただろうか。だが、現実には「新気学派」が、ここに出現したのである。

張立文は、1940年以降の「新理学」「新心学」「新気学」に対してどのように評価し、和合学を形成するために如何なる認識を行っているか。

> 新理学は馮友蘭に到るまで、新心学は熊十力より賀麟を経て牟宗三に到るまで、新気学は張岱年の提出より大陸の四十年代の発展に到るまで、その体系はどれも完璧な善に向かっている。
>
> 多くの哲学はその体系が完璧に善なる段階には、つまりその型を転換する時でもある。だが、新理学、新心学、新気学はそれぞれが西洋文化の挑戦下において、西洋文化のある理論的観点を吸収して、旧理学、旧心学、旧気学を改造して、新らしさを開発したが、その新と旧とは相対的なもので、新理学、新心学、新気学は当面の現代化の衝撃下において、それぞれが旧学を完成させようとする方向に向かっていただけであった。新しい創造が要求されているのである。
>
> 新理学、新心学、新気学はその思惟的模式から言えば、どれも形而上学的本体論哲学の伝統に属している。この点では、どれも旧理学、旧心学、旧気学を超越していない。（「新儒家哲学與新儒家的超越」『中国近代新学的展開』所収）

以上のような認識から、旧三学とともに新三学を超克した「中国文化の精髄であり、生命の最も完全円満な体現形式」が和合学であると主張している。

> 和合学は既に旧三学や新三学に対して、それらを超越している。言うまでも

差異を表現している」と提示した。

馮友蘭先生の認識によれば、道問学と尊徳性との区分で朱と陸とを区分することは妥当ではなく、・・・朱陸の学は実は「理学と心学」で区分すべきである。

40年代になると、新理学・新心学・新気学が個別の学者によって唱道されたが、その影響力は微々たるものであった。筆者（張立文）は、この三派は均しく理を講じているから、それぞれ「絶対理」「主体理」「客体理」と称す。

（「新儒家哲学與新儒家的超越」『中国近代新学的展開』所収）

宋明儒学史の研究者にとっては、宋明学の主要な思想潮流が朱子学派と陸王学の二派なのか、別に一派を立てて三派なのかは重大な問題である。大概、現在の日本人研究者は二派説を採用し、中国人学者は三派説に立っているように見える。二派については、心よりも性即理を知行の基準とする朱子学を「理学」と称し、理の内実は心によって定められると認識している陸王学を「心学」と称しているが、これは二派説の研究者も三派説の研究者も共通認識に立っている。

三派説を提起した先駆者は、張岱年である。張岱年は、解放前の民国36(1947)年8月、哲学的メモとも言える「事理論自序」を記し、その中で次のように書いている。

学人之中、述顔戴之旨者、宗陸王之説者、紹程朱之統者、皆已有人。而此編所談、則横渠船山之旨為最近。

張岱年の後日談によれば、これは1942年春に記述したそうであるが、この『事理論』が清華大学出版社から公刊されたのは1989年である。一部の特定の人しか目にしなかっただろうが、この観点が大きな歴史的役割を演じることになる。解放後、マルクス主義的観点によって記述された『中国思想通史』等によって、三派説は教科書をはじめとして大普及するのであるが、張岱年は『中国思想通史』の編集に対しては参加していない。しかし、三派説を最初に提起したのはこの張岱年のメモであると言えるであろう。張岱年は、唯物論的観点から観れば、宋明儒学の中の張横渠や王船山のように気を重視する思想家の説が唯物論に近似していると指摘した

の思想であり、就中それを集大成した朱子学のことである。当時、性即理の人間観を説く朱子学に対して、心即理を説いた陸象山は宇宙論や人間観について朱子学と対立して妥協することはなかった。明代になって、この陸象山の心即理の人間観を継承発展させた王陽明は、国家の御用学に堕落した朱子学が形骸化教条化し思想的に枯死した段階で、朱子学の世界観・人間観や思想構造と根本的に衝突・「突融」・融合を経て新和合の陽明学を提唱した。思想史研究者は、この陽明学を「明学」と呼び、「宋学」と「明学」を二大頂点とする思想史的展開を「宋明学」と称している。そこに認められる豊富で深淵な哲学的成果は、中国思想史上で最も光彩を放っている哲学的精華と言えるであろう。

ところで、欧米文化のアジア進出にともなって、中国も近代化に迫られ「宋明学」は、西洋哲学と衝突・「突融」・融合を経て新和合の哲学形成が重要課題となる。仮に20世紀に展開された「宋明学」近代化の哲学者の活動を集大成したものが、張立文の「和合学」であるとすれば、この「宋明学」近代化の展開こそ、和合学誕生の母胎であると言えるであろう。

中国宋元明清の時代に、哲学の理論や思惟は一つの高峰に到達した。梁啓超はこの時期の学術を「宋及び明の理学」（馮友蘭先生は道学と称す）と考え、一般の人は理学を二派に分け三派と成ると認識したが、それを現代から言えば「理本論（程朱学派）」「心本論（陸王学派）」「気本論（張載から王夫之まで）」である。

南宋時代、朱子と陸象山の鵝湖の会があったが、その主旨は「学を為す方法」の論争であった。陸象山は「易簡の工夫」を、朱熹は「支離の事業」を主張して、その時に既に分岐が現れていた。

後になって黄宗羲の師である劉宗周は、朱陸の異説を「性体と心体」の区別であると説明したが、理には言及しなかった。黄宗羲は方法上から朱熹は「道問学を主とする」、陸象山は「尊徳性を宗とする」と区別した。1930年代になって、馮友蘭は『中国哲学史』を著し、その中で「朱子は性即理を言い、象山は心即理を言った。この一語はたった一字の違いだが、実は両者の哲学の重要な

例えば、男と女が衝突や融合を経て結婚する。女は妊娠し、受精卵は胎児に成長する。この受精卵から胎児の段階過程が「突融」段階で、やがて胎児は月が満ちて、母胎から離れて新生児が誕生する。この新生児は父母の和合体であり、新しく独立した人格である。子供は父母の遺伝子を継承して誕生しているから「子は父母からの遺産継承者」であると言えるであろう。中国古典の『礼記』祭義第二十四では「身は父母の遺体なり。父母の遺体を行ふ、敢て敬せざらんや」と述べている。

このように考えれば、「和合学」形成過程には東洋(中国)文化と西洋文化の衝突・「突融」・融合の過程が包含されており、また伝統文化と現代文化の衝突・「突融」・融合の過程が内包されている。和合学は枯渇した死んだ思想ではなく、生生変化し活きている思想である。そこでは和合を目的としない衝突・「突融」・融合は将来性のない生産的でない運動と言えるであろう。和合によって衝突・「突融」・融合過程におけるそれぞれの営為は価値をもった有意義なものとなる。

## 二

以上の和合学的経過を重視する立場から中国伝統思想の歴史を観察すれば、朱子学や陽明学に代表される「宋明学」の価値が再評価されるであろう。「宋明学」とは、宋代に形成された「宋学」と明代に形成された「明学」の新しい儒学の思想潮流を総称したもので「新儒学」とも呼ばれている。孔子や孟子の原儒学は、聖人の説いた絶対真実の道に対して、学ぶ者は「述べて作らず」という学習者であって、決して絶対真実の道の創造者ではあり得ない。ところが、万人が平等に「仏に成る」種子を固有していると主張する外来の仏教思想を中国思想界が受容した後、その仏教思想の儒教的超克に取り組むことによって形成された「新儒学」は、学ぶ者が「学んで、聖人に至る可し」と道の創造者、道の体現者になることができる。「新儒学」はここが新しいのであるが、この孔孟の原儒学から新儒学への変革は、異端思想である仏教との衝突・「突融」・融合を経過した新しい和合体でなければ誕生不可能であっただろう。「宋学」は、外来思想の仏教に対して中国土着思想の儒学が衝突・「突融」・融合を経過して、その果てに形成された北宋時代の周濂渓・張横渠・二程子等

## 21世紀の中国哲学

# 張立文の和合学(そのIII)

難　波　征　男

## 一

1919年の五四文化革命以来、20世紀の中国文化は西洋文化と衝突し、それに圧倒されながらも自己独自の道を模索しつづけている。五四文化革命の当初から、中国古典哲学者はこの危機に対して果敢に挑戦し、その中で哲学的思索と体認を蓄積して、豊富で重厚な哲学的成果をあげてきた。張立文は、これら先哲の哲学思想を如何に評価し、これらの思想的学問的業績をどのように和合学の中に集大成していったのであろうか。

> 中国文化（哲学）は西洋文化（哲学）と激しく衝突し、また伝統文化（哲学）は現代文化（哲学）と激しく衝突するなかで、相互に錬磨され融合して変化し、そこから中国文化（哲学）の新しい和合体が生生化育される。これが中国文化（哲学）新理論体系の誕生である。(「百年中国文化哲学」『深圳特区報』1999/10)

と、張立文は述べている。つまり和合学は、中国伝統文化（哲学）が西洋文化（哲学）や現代文化（哲学）と衝突や融合を経て生生された新しい和合体の文化（哲学）であると言う。「君子の学は、和して同ぜず」。和合体の理論体系には、宇宙存在が「陰と陽」二気の衝突や融合を経過した和合によって生生変化しているように、相互に矛盾した二要素の衝突や融合、さらに「突融」の過程が包含されている。